

桑田衡
平譯述

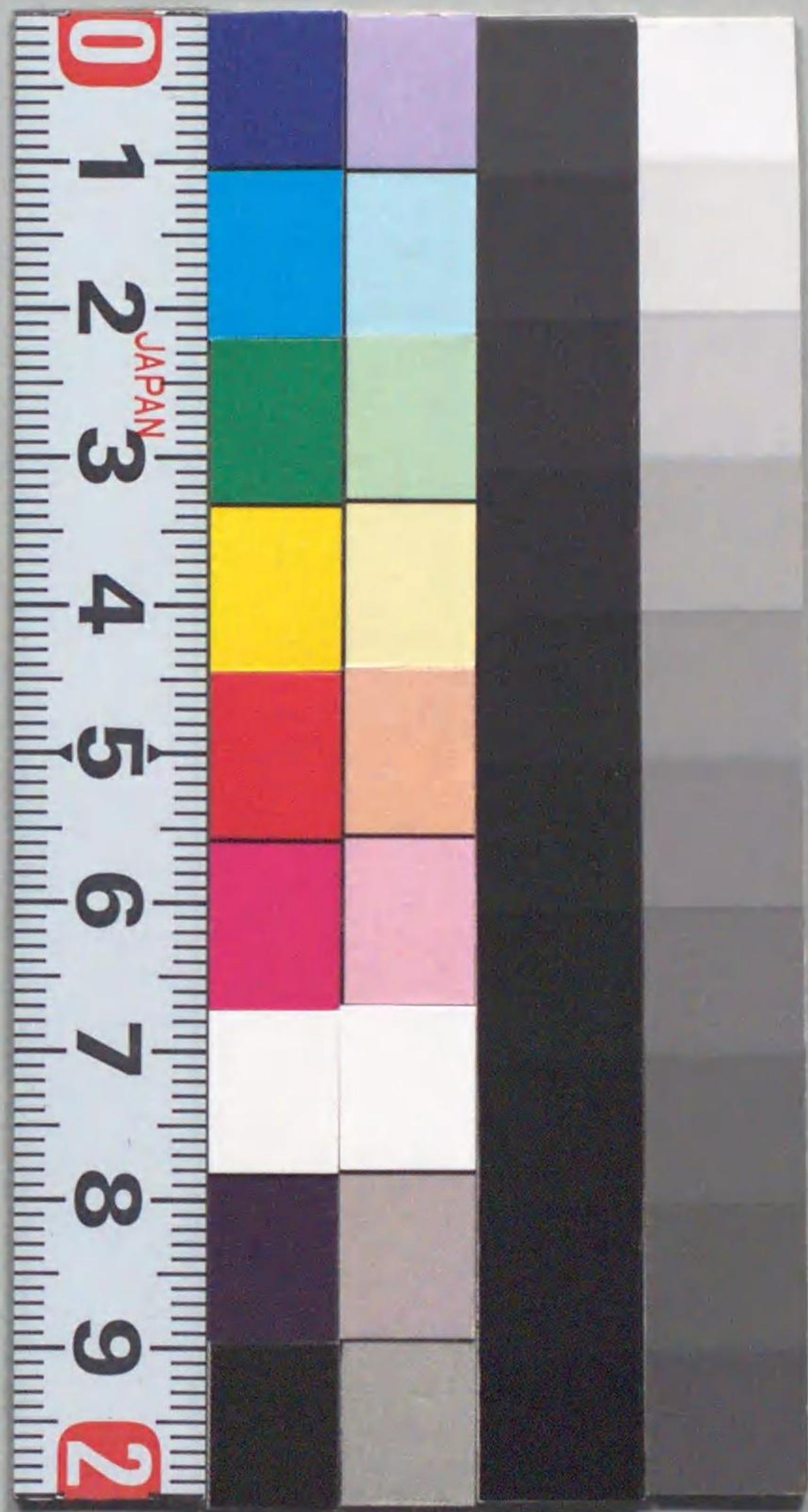
内科摘要

卷四

Y994-J10240



1200901348422

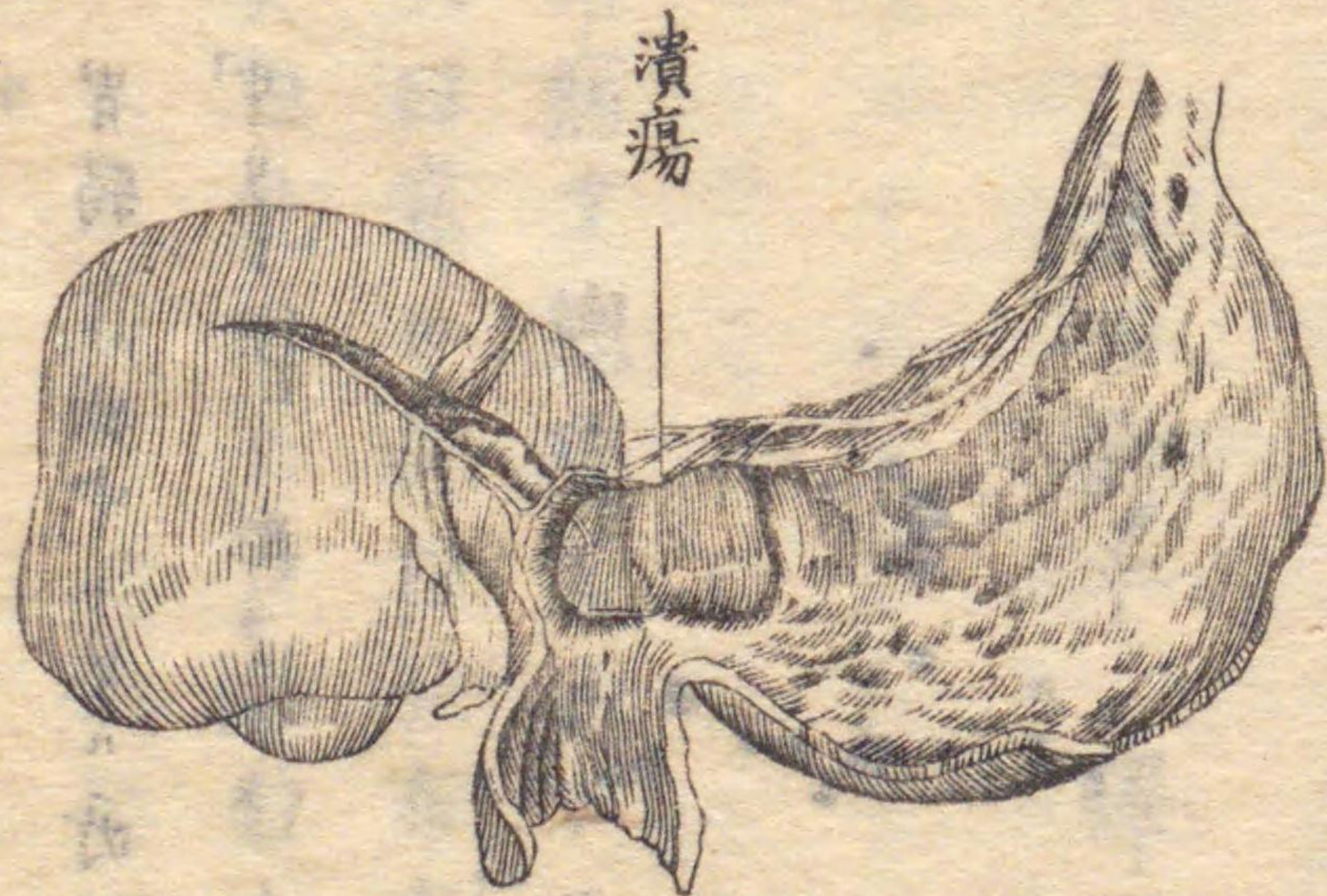


Y994

J10240

第七十圖

胃ノ潰瘍ヲ示ス即チ
 其上縁ニ肺胃神經蔓
 延シ隣ト肝ノ左房トヲ
 以テ潰瘍ノ底面ヲ為
 シ其底面纖維様變質
 ヲ致ス者



潰瘍



I 種

W



1200901348422

第七十一圖

胃ノ潰瘍穿開ヲ起シ裏面ノ
粘膜收縮シテ潰瘍ノ周圍ニ皺
襞ヲ為ス形ヲ示ス



第七十二圖

胃弱ノ吐物中ニ見ル所ノ
カリシナレノ形ヲ示ス



華氏内科摘要卷之四

東京

桑田衡平 譯述

消食器諸病

自口部
至胃腸

口炎 スト マチ、ス甸

口炎トハ口中ノ焮衝性諸病ヲ總稱スルナリ之
ヲ區別スレハ曰單純口炎曰鷺口瘡曰亞布底曰
口癌曰口疽曰汞毒性口炎曰乳母ノ口炎曰失苟
兒倍苦性口炎是ナリ

單純口炎

シムプル、スト
マチ、ス甸

誤テ熱湯或ハ腐蝕液ヲ口中ニ入ル、其ハ其為ニ此焮衝ヲ起ストアリ然ル其ハ舌齒齦頰内口蓋乃ヒ喉頭等ノ粘液膜ニ於テ赤色及ヒ腫脹ヲ現ハシ口内刺カトシテ熱灼スル者ナリ但シ其腐蝕液硫酸或ハ結列ニ由ル者ハ粘液膜ノ表面ヲシテ白色ニ變セシムルヲ常トス此症ハ唯緩易ノ療法ニ由リ二三日ニシテ概ネ恢復スヘキ者ナリ然レ氏若シ其焮衝舌質ニ起ル其ハ殊ニ劇勢ヲナス者ニシテ容易ニ治シ難シトス予曾テ舌ノ甚シク腫脹シテ口外ニ突露シ一週間ヲ

經ルモ尚未夕之ヲ收ムルハ能ハサル者ヲ目撃セリ
又此單純性ノ口炎ニ於テ口中微糜爛シ且裂傷ヲ生シテ其痛モ亦隨テ増加スルハ往々之アリ然ル其ハ通常必ス流涎ヲ起ス者ナリ
〔療法〕初メ先ツ冰片若クハ冰冷ノ護謨漿或ハ亞麻仁煎ヲ以テ頻々含漱セシムルヲ良トス又其腐蝕物ニ由テ起ル者ニハ甘扁挑油若クハ「グリセリン」ヲ以テ含漱セシムレバ能ク其刺戟ヲ緩解スルヲ得ヘシ

〔第五十方〕

グリセリン

分一 薔薇水

分五 ヲ取り混和

シテ含漱劑トス

又劇性ノ舌焮衝ヲ起スルハ舌面ニ水蛭ヲ貼シ
加之ナラス其腫脹ヲ減センカ為ニ充分ニ亂刺
スルヲ要スルコアリ又其末期ニ至テハ明礬水
ニ了水六 或ハ皓礬水 汚ノ者一ヲ以テ含漱スル
汚ノ者 汚ノ者 汚ノ者
ヲ良トス然レモ此藥ハ齒牙ノ瑤瑯質ヲ侵スノ
性アルカ故ニ必ス注意シテ之ヲ久シク齒牙ニ
觸ル、トヲ戒ムヘシ

口中粘液囊炎

ホルリキュラ、イン
フレメシエン英

此症ハ舌軟口蓋等ノ表面ニ於テ赤色細小ノ腫
起ヲ簇々發スルヲ以テ之ヲ識別シ得ヘシ是レ
殊ニ生齒期ノ小兒ニ於テ常ニ多シトス其他大
人ニ於テモ亦體質薄弱ナル者ハ之ヲ患フルコ
アリ然レモ其療法ニ於テハ敢テ別種ノ伎倆ヲ
要セサルナリ

亞布底

アフテ一旬

此病ハ初メ先ツ口中焮衝シテ水泡疹ヲ發シ隨
テ此疹忽チ小瘡ニ變シ以テ口中ノ滿面殆ント
白色ヲナス者ナリ即チ其水泡疹ヲ發スルヤ初

メハ細小ニシテ其形正圓或ハ楕圓ナル者アリ
其色モ亦白クシテ猶ホ真珠色ノ如ク泡内ニ沬
乙液ヲ蓄フト雖モ二三日ノ後ハ其泡忽チ破潰
シテ知覺銳敏ナル白色ノ小瘡トナリ其周圍ニ
微紅暈ヲ畫シ各顆相離レテ散布シ或ハ數顆相
合シテ潰爛スル者アリ又之ニ兼テ全身發熱シ
且胃中不和ヲ生ス蓋シ初生兒ノ此病ニ罹ルハ
罕ナリト雖モ稍其生長セシ者ニ於テハ偶之ヲ
見ルコトアリ其他ハ多ク大人ノ齶齒ヲ患フル者
ニ於テ之ヲ發スル者ナリ然レモ概シテ之ヲ論

スレバ此病ハ稀有ナル者ニシテ其經過モ亦通
例一週或ハ二週間ニ於テ恢復ヲ得ル者トス但
シ其瘡ノ數顆相合シテ潰爛セル者ニ於テハ荏
苒トシテ一箇月ニ及ヒ就中其惡性ナル者ニ至
テハ終ニ不幸ニ陷ル者モ亦罕ニ之アルヲ見ル
ナリ

[療法] 全身ノ景況ニ從テ或ハ清涼下泄藥或ハ塩
類ノ發汗劑(按スルニ清涼發汗劑ニシテ即チ枸
櫞酸剝篤斯沸騰飲民埤列里精等ヲ云フ)ヲ要シ
又胃ノ刺衝ヲ寬解センカ為ニハ宜ク重炭酸曹

達若ハ麻屈涅失亞ノ如キ制酸劑ヲ用フヘシ塩
 酸剥篤斯五ハ乃至二十ハヲ取テ一日四次之ヲ
 用フルモ亦良トス又局處ノ療法ハ初メ先ツ亞
 麻仁煎若クハ護謨漿若クハ「グリセリン」ニ薔薇
 水ヲ和シタル者ヲ以テ頻々含漱セシメ己ニ潰
 爛ヲ生スルキハ精製加兒基ニ等分ノ護謨粉ヲ
 和シテ日々數回宛之ヲ其瘡面ニ搽布シ或ル人
 ハ「グリセリン」ト精製石灰トノ合劑ヲ塗擦スル
 ヲ優レリトス或ハ重硼酸曹達即チ硼砂没藥明礬皓
 礬鉛糖等ノ含漱劑ヲ用フルモ亦可ナリ若シ又

其瘡劇性ナルカ或ハ頑固ナル者ニハ濃皓礬水
十五ハ水若クハ濃硝酸銀水二十ハ水若クハ固
 形硫酸銅即チ丹礬ヲ以テ毎日或ハ隔日ニ一回宛之
 ヲ瘡面ニ塗擦スルヲ良トス
 [第五十一方] 精製加兒基細末 護謨漿各等ヲ取リ
 混和シテ口内ノ潰爛ニ搽布ス
 [第五十二方] 重硼酸曹達子二 没藥末子一 水六ヲ
 取リ混和シテ含漱劑トス
 [第五十三方] 皓礬二ハ至十ハ 薔薇水一ヲ取リ溶和
 シテ含漱劑トス

鵝口瘡 スロシ一名
ムケツト英

此病ハ通常小兒ニ於テ寢モ多キ者ニメ即チ其
徵候ハ初ノ先ツ口内一般ノ焮衝ヲ起シ一日或
ハ二日ヲ經テ忽チ口内ニ數多ノ白色ナル小點
ヲ呈ハシ此點相連合シテ其内ニ白色凝乳様ノ
物ヲ滲出シ以テ數顆ノ白斑ヲ為ス者是ナリ屢
テ、アフトト看做ス但シ其惡性ノ者ニ於テ
アリ宜シク注意スヘシ誤ハ其斑茶褐色ヲ為ス
剥離スレモ再ヒ之ヲ生シ此ノ如クスルヲ數回

ニ及ヒ口内熱灼シ胃中亦不和ニシテ嘔吐及ヒ
下利ヲ發シ全身稍發熱ス而シテ其經過ハ一二
週或ハ三週又ハ其餘ニ及フコトアレモ生來虚弱
ノ小兒ニ於ケル外ハ大抵危險ナルコトナシ
〔病性〕蓋シ凝乳様滲出物ノ固有性ハ至微植物ノ
發育ニ類スル者ナランカ是ヲ以テオイダム、
アルビカシス鵝口瘡芽ノ名アリ
〔療法〕總テ塩酸剥篤斯ヲ劇性ノ口炎ニ用井テ其
偉効アルコトハ今日ノ實驗ニ由テ之ヲ確證スヘ
ト蓋シ此藥ノ口炎ニ特效ヲ奏スル所以ノ理ハ

未夕之ヲ推究スルヲ能ハスト雖モ予ハ鶯口瘡
 及ヒ亞布底ニ於テ專ラ之ヲ用キント欲ス例之
 ハ五歳未滿ノ小兒ニ於テハ塩酸剥篤斯一匁乃
 至五匁ヲ取リ適宜ノ水ニ溶解シテ日々數次之
 ヲ與フルヲ良トス又此症ニ於テハ麻屈涅失亞
 ヲ以テ適當ノ下劑トス若シ又其兒生來虛弱ナ
 ル者ナレハ規斤牛肉羹汁囉囉地グランド及ヒ牛乳等ヲ
 用フルヲ要ス但シ是ニ囉囉地グランドヲ用井ント欲セ
 ハ亦必ス患者ノ體質ト年齢トニ應シテ其量ヲ
 裁酌セスンハアラス

第五十四方 塩酸剥篤斯半匁 水六匁ヲ取リ溶和シ

テ每三四時ニ半汚許ヲ與フ按スルニ原書ニ

ハリ是恐クハ一茶ヒノ誤ナランカ否ラサレ

ハ又大人ノ服量ナランカ未タ詳カナラス

患部ノ處置ハ初メ先ツ亞麻仁或ハ護謨ノ乳劑

ヲ以テ含漱セシメ次ニグリセリン一分ニ薔薇

水四分或ハ五分ヲ和シタル者若クハ重硼酸曹

達水二匁水四ヲ以テ含漱セシメ若クハ重硼酸

曹達白糖各等分ノ粉末ヲ摻布スルヲ良トス又

本病ノ末期ニ至テハ没藥丁幾ニ汚水ニ汚ヲ和

シタル者若クハ明礬水若クハ皓礬水ヲ以テ含

漱セシメ或ハ塩酸一了蜂蜜或ハ單一汚水二汚
 ヲ取り混和シテ駱駝毛ノ筆ヲ以テ時々之ヲ塗
 擦スルヲ良トス但シ此時ハ注意シテ其藥液ヲ
 無用ノ部ニ散漫セシメサルヲ要ス按スルニ小
誰ハサル者ニハ總テ筆ヲ以テ其
藥ヲ塗擦スルモ亦可ナランカ

口癌

カンクリュム、
オリス甸

此病ハ初期ヨリ真ニ口内ノ一部糜爛スルヲ以
 テ本性トス乃チ其初メハ僅カ唇ノ裏面ヲ侵ス
 ト雖モ終ニハ喉頭ニ蔓延シ瘡面ハ灰白或ハ帶

黄白色ニシテ其邊緣ニ焮腫ヲ呈ハシ頰部外面
 ニ腫脹シテ其痛頗ル甚シク且大ニ流涎シテ呼
 吸ニ惡臭ヲ放チ屢發熱スルヲアリ蓋シ本病ノ
 經過ハ緩慢ニシテ數週加之ナラス累月ノ久キ
 ヲ經ルト雖モ其不幸ニ陷ル者ハ殆ト罕ナリ又
 此病ハ二歳ヨリ六歳ニ至ルノ小兒ニ於テ最モ
 多シトス

療法

第一ニ患者ノ體質ヲ商量シ以テ之ニ適應
 スル所ノ普通療法ヲ施スヘキハ勿論ナリ其他
 ハ諸種口炎ノ條下ニ於テ己ニ記載セシ所ノ局

處藥中ニ就テ其宜ヲ採用スヘシ例之ハ濃皓礬
水十五分或ハ二十若クハ固形硫酸銅ヲ以テ每
日二回宛瘡面ニ塗擦シ其間ニハ加兒基ト護謨
トノ散末ヲ以テ瘡面ヲ覆ヒ且時々グリセリン
ニ薔薇水ヲ和シタル者ヲ以テ之ヲ洗フトキハ
窠モ効アリ

口疽 ガングレナ、オリス旬

總テ口内ノ劇性焮衝或ハ其潰爛モ亦猶他部ノ
焮衝等ニ於ケルカ如ク動モスレハ其壞疽ニ陷

ルヲアリ然レ唯此口疽ハ一種固有ノ病ニシテ
固ヨリ劇性ノ焮衝ヲ先發スルヲナク直チニ本
病ヲ發スル者ナリ是レ其體質ニ斯ル素因ヲ有
スル者ニ於テ殊ニ然リトス蓋シ此病ハ小兒ニ
於テ窠モ多シト雖レ大人ニ於テモ亦偶之ヲ見
ルヲアリ乃チ其症狀タル初メハ殊ニ齧肉或ハ
頰内ニ灰白色ノ潰瘍ヲ發シテ頰面腫起シ而シ
テ後漸々周邊ヲ侵蝕スルニ至レハ瘡内自ラ腐
肉ヲ生シテ呼吸ニ惡臭ヲ放チ多量ノ流涎ヲ起
シ以テ酷厲液ヲ漏洩ス其他此ノ如ク潰瘍ノ次

第二増加スルハ随テ骨面モ亦之カ為ニ侵蝕
セラレテ終ニ腐骨ヲ生シ甚シキハ齒牙ノ脱落
スルニ至ル者アリ加之ナラス其侵蝕スルコト太
夕速ニシテ頰顳ノ骨肉ヲ穿ツハ随テ節骨モ
亦之ニ連累セララルコトアリ
以上局處ノ症状ニ兼テ全身ニ虚性熱ヲ發シ以
テ漸々衰弱シ加之ナラス愈其末期ニ及フハ
溶崩性ノ下利及ヒ脱汗ヲ起シテ終ニ死ヲ致ス
コトアリ蓋シ此病ハ固ヨリ猛烈ナル者ナレトモ
或ハ又大氣ノ不潔殊ニ衆人雜居ノ空氣及ヒ榮

金朝齋雜抄

養ノ不足等ニ因リテ著シク此症ヲ増進セシム
ルコトアリ故ニ早ク此ニ注意シテ整療ヲ加フル
ハ此症ト雖モ亦必スシモ難治ノ病ニ非ス然
レモ若シ之ヲ等閑ルノ後其己ニ廣ク侵蝕スル
ニ至テハ大率不幸ニ陷ル者トス

〔療法〕予カ鄙見ニ依レハ初期ニ於テ必ス塩酸剥

篤斯ヲ試用スルヲ良トス又此病ハ虚性ニシテ
忽チ衰弱ヲ致スカ故ニ早ク規尼、格魯兒化鐵丁

幾通稱塩酸ヲ用井之ニ兼テ牛肉羹汁乳清酒肺

鉄丁幾ノ條下或ハ囉囉地若クハ酒ニ牛乳ヲ加ヘタル

外科抄 卷之四

金草藥 補

者等ヲ適宜ニ與フルヲ要スル者ナリ

〔第五十六方〕格魯兒化鐵丁幾十滴乃至三十滴ヲ

取り水ニ和シテ與フルヲ日ニ三次

患部ノ處置ハ初メ先ツ收斂性洗滌劑前ニ見ユヲ換

用シ其己ニ壞疽状ヲ顯ハス者ニハ格魯兒曹達

水一汚ヲ「グリセリン」ニ汚ニ溶和シテ頻々之ヲ

塗擦シ或ハ結列屋曾篤三滴乃至二十滴ヲ「グリ

セリン」水或ハ一汚ニ溶解シテ之ヲ塗擦スルモ亦

同効アリ其他過酸化滿俺剝篤斯十ハヲ水一汚

ニ溶解シタル者若クハ格魯兒化亞鉛一ハヲ水

一汚ニ溶解シタル者若クハ亞硫酸曹達一ヲヲ

水一汚ニ溶解シタル者若クハ貌魯密尼謨半ヲ

ヲ水二汚ニ溶解シタル者等ヲ換用スヘシ

汞毒性口炎 メルクルソール

汞劑ノ瞑眩ニ由テ起ル所ノ口炎即チ流涎症ハ

其將ニ之ヲ發セントスルヤ口内銅味ヲ覺エテ

齦肉疼ミ齒牙モ亦知覺銳敏ニシテ上下相齒ム

中ハ微痛ヲ起シ又齦肉ハ腫起シテ赤色トナリ

且其邊縁ニ近接シテ濶キ白線ヲ畫スル等ヲ以

外科抄 卷之四 十一 載余齋或辛

テ前徴トス而シテ舌モ亦腫脹シテ流涎大ニ
 増多シ頰内ヨリ喉頭ニ至ルノ際糜爛シテ疼痛
 甚シク呼吸惡臭ヲ放ツニ至ル其他劇症ニ於テ
 ハ齦肉糜爛シテ終ニ齒牙ノ脱落スルヲアリ加
 之ナラス其口疽狀ニ傾クキハ瘡内ニ腐肉ヲ生
 シ嚙下太々困難ニシテ殆ント餓死セントスル
 ニ至ル者アリ夫レ此ノ如ク局處ノ刺衝甚シキ
 キハ全身ニ於テモ亦多少必ス發熱スル者ナリ
 [療法] 輕症ノ流涎ハ大抵二三日ニシテ自ラ緩解
 スヘシ然レモ又此症ニハ囉囉地ニ四倍ノ水ヲ

加ヘ之ヲ以テ含漱セシムルヲ良トス或ハ之ニ
 明礬若クハ少量ノ没藥丁幾ヲ配用スルモ亦可
 ナリ又劇症ニ於テ口内潰爛シ或ハ瘡内ニ腐肉
 ヲ生スルキハ猶他ノ口炎ニ於ケルカ如ク之ヲ
 處置スルヲ佳トス蓋シ阿片ノ流涎症ニ於ケル
 ヤ只患者ノ苦悶ヲ寬解センカ為ニノミ拵弗見
 散ヲ取テ臨臥ニ之ヲ頓服セシムルヲ以テ足レ
 リトス其他方今ノ醫家ハ皆己ニ療法ノ宜キヲ
 得テ常ニ患者ヲシテ劇シキ流涎ニ至ラシムル
 ヲナシト云フ

乳母ノ口炎 モリスス、ソール、

授乳スル所ノ婦人若クハ累月ノ妊婦ハ動モス
ハ初メ先ツ舌上及ヒ頬内ニ僅小ナル硬腫ヲ發
シテ痛楚ヲ覺エ忽チ潰爛シテ其痛甚シク時ト
シテハ其刺衝ノ為ニ發熱スルコトアリ然レモ亦
是時小兒ノ哺乳ヲ止ル由ハ速ニ輕快ヲ得ル者
ナリ

〔療法〕塩酸剥篤斯ハ此病ノ特效藥ニシテ即チ之

ヲ用キント欲セハ二十分ヲ取テ毎日三四次之
ヲ與フルヲ良トス若シ又衰弱ノ候顯然タル者
ニハ須ラク鐵劑規尺等ヲ用フヘシ但シ患部ノ
處置ニ就テハ彼ノ口癌等ノ條下ニ於テ己ニ記
載セシ所ノ品類ヲ換用スルモ亦能ク其効ヲ奏
スル者ナリ
夫苟兒倍苦性ノ口炎ハ本病ノ條下ニ於テ之ヲ
論載スヘシ

扁桃腺炎 トンシルリチス甸

外科摘要
卷之四
四

扁桃腺炎ノ劇症ヲ指シテ世ニ之ヲ「グインシ」ト呼フ即チ其症狀タルヤ初メハ嚥下ニ由テ咽喉ニ痛ヲ覺エ偏側或ハ兩側ノ扁桃腺ニ於テ疼痛及ヒ腫起ヲ呈ハシ若シ二三日ニシテ輕快ヲ得サルキハ其痛増劇シ斷エス筈タトシテ跳動スルカ如キヲ覺エ嚥下モ亦極テ困難トナリ患者神思兢々トシテ甚タ安カラサルニ至ル者ナリ此時自然ニ膿潰スルコトアリト雖モ若シ然ラスンハ早ク醫ノ手術ヲ須テ之ヲ切開シ以テ其膿ヲ泄ラス中ハ速ニ恢復スルコトヲ得可シ

金朝齋藏書

療法 初日先ツ枸橼酸麻屈涅失亞若クハ瀉利塩若クハ他ノ清涼下泄藥ヲ頓服セシメ次ニ吐根酒二十滴ヲ取テ每三時ニ之ヲ用弁又之ニ魚テ亞麻仁煎若クハ亞麻仁里沒奈埤ヲ頓服セシメ若シ又咽喉ノ焮衝及ヒ疼痛ノ甚シキ者ニハ外部ニ亞^{アメリカ}産ノ水蛭(按スルニ亞産ノ水蛭ハ小ニシテ每條一沼餘ノ血ヲ泄ラシ歐羅巴産ノ者ハ大ニシテ每條半沼許ノ血ヲ奪フト云フ)二十條乃至四十條ヲ貼シ而シテ后亞麻仁粉ニ豕脂及ヒラウダニムムヲ加ヘタル巴布ヲ貼スルヲ良トス

外科摘要
卷之四
十四
載余齋藏書

外科摘要 卷之四

然レ其輕症或體質虚弱ノ者ニハ水蛭ヲ用キス
シテ直ニ此巴布ヲ貼スヘシ又之ヲ換フル毎ニ
其部ニ硃砂揮發膏或ハ硃砂精ヲ塗擦スレハ殊
ニ効アリ其他右ノ方法ヲ施スト雖モ病勢尚劇
甚ニシテ膿膿ノ候未タ顯然タラサルモ外部
ニ小發泡膏ヲ貼シ若クハ沃實丁幾ヲ塗擦スル
ヲ良トス然レ其己ニ膿膿スルヲ判然タル者
ニ於テハ咽内ヨリ之ヲ切開シ易カラシメンカ
為ニ巴布ヲ持長シテ貼スルヲ優レリトス
夫レ扁桃腺ノ己ニ膿膿セシ者ニ於テ之ヲ切開

金朝齋

セント欲セハ必ス鍼尖ヲ咽喉ノ中央ニ向ケテ
刺入スヘシ若シ其斜ニシテ外側ニ向フモハ誤
テ内頸動脈ヲ傷ルノ恐レアリ是亦注意セス
ハアルヘカラス
又此扁桃腺炎ハ其膿潰ニ至ラスシテ自ラ消散
スルヲアリ然レ其此炎ハ動モスレハ再發シ易ク
此ノ如クシテ若シ數回ニ及フモハ終ニ其扁桃
腺ノ非常ニ増大スルヲ往々之アリ
然ルモハ收斂性ノ含漱藥ヲ持長シテ用キ或ハ
日々一回宛單寧酸若クハ硝酸銀ノ濃溶水ヲ塗

外科摘要

卷之四

十五

載余齋

外科雜考
喉症之類

金朝齋雜考

擦シ以テ其腺ヲシテ收縮セシムレハ再ヒ故ニ復スルヲ得ヘシ然レモ若シ又右ノ諸藥効ナキキハ止ムコトヲ得ス其腺ノ一部ヲ截除スルノ法ヲ施スヘシ即チ之ヲ截除スルニハ「フア子ストック」氏發明ノ器械及ヒ其他適當スル所ノ器械ヲ用フルキハ其術便易ニシテ且聊モ危キコトナシトス但シ全腺ヲ截除スルノ法ハ概シテ無用ニ屬スル者ナレハ此ニ載セス

食喉炎 ハリンゲチス甸

食喉炎ノ輕症ハ通常寢モ多キ疾患ニシテ其療法ニ於テハ唯緩和ノ含漱劑例之ハ亞麻仁煎若クハ撒兒比亞煎ニ明礬ヲ加ヘタル者ヲ以テ漱カシメ且緩和ノ蒸溺劑例之ハ亞麻仁護謨若クハ榆皮ノ浸汁ニ碯砂揮發膏若クハ的列並油ヲ和シタル者ヲ以テ外ヨリ其部ヲ温蒸シ内服ニハ塩類ノ下泄藥ヲ頓服セシメ緩和滋養ノ飲料ヲ與フル等ヲ以テ足レリトス但シ小兒ノ藥液ヲ以テ含漱シ能ハサル者ニハ鷲管ヲ以テ明礬ノ細末ヲ咽中ニ吹入ル、モ亦可ナリ

外科雜考

卷之四

十六

載余齋雜考

内科摘要
卷之四

金朝齋

蓋シ慢性食喉炎ハ固ヨリ危険ナル局處病ニ非
スト雖氏亦之カ為ニ患者ヲシテ大ニ困苦セシ
ムルヲ屢之アリ乃チ此症ニ於テハ絶エス咽喉
ノ粘液膜ニ充血ヲ起シ粟粒状ヲ現ハシテ其部
ノ甚シク枯燥スルアリ或ハ粘稠ノ液ヲ分泌ス
ルアリ而シテ患者斷エス其意ヲ咽喉ニ介セサ
ルヲ得ス其療法ハ諸種ノ收斂劑緩和劑及ヒ患
部ノ機軸ヲシテ一轉セシムル所ノ諸藥ヲ外用
スルヲ良トス然レ氏又硝酸銀單寧酸硫酸塩酸
皓礬鉛等ヲ用ノルモ尚其効ナキ者ニ於テ氷片

ヲ嚥下セシメ或ハ氷冷水ヲ以テ頻々含漱セシ
メテ殊効ヲ奏セシコアリ
第六十方 單寧酸 三十八至 水 一ヲ取り溶和シ毛
筆ヲ以テ喉頭ニ塗擦ス又反對刺衝法ト做シ
テ小發泡膏ヲ結喉ノ部ニ貼スルコ再三ニ及
ヒ或ハ沃實丁幾若クハ巴豆油ヲ塗擦スルノ
法ハ總テ慢性咽喉炎ノ肝要ナル療法ナレハ
此慢性食喉炎ニ於テモ亦能ク之ニ適應スル
者ナリ

内科摘要

卷之四

十七

或余齋

内科摘要 卷之四 咽後膿瘍

咽喉潰爛 ソールセ、レ、ス、ロ、ウ、ト、英

此症ハ大抵癩毒性或ハ結核性ノ者ニシテ其獨發スル者ハ殆ント罕ナリ

〔療法〕獨發症ニ於テハ硫酸銅水ヲ塗擦シ或ハ患部ノ淺クシテ之ニ抵觸シ得ヘキ者ニハ固形硝酸銀ヲ以テ輕々其潰爛ニ塗擦スルヲ良トス又癩毒性ノ者ニ於テハ之ニ兼テ沃度剥篤斯ヲ内服セシメ又其結核性ノ者ニ於テハ強壯劑肝油及ヒ滋養ノ食餌ヲ與フルヲ要ス

〔第六十一方〕沃度剥篤斯 一、三、至 桂水或ハ薄荷水

六 汚ヲ取り溶和シテ日ニ三次半汚許ヲ與フ

咽後膿瘍 アレト、ロ、ハ、リ、ン、シ、ユ、ル

此膿瘍ハ食喉ノ後際即チ此部ノ粘液膜ト項椎トノ間ノ結締組織中ニ生スル者ニシテ熱病後ニ於テ偶之ヲ繼發スルコトアリ然レモ是レ亦甚タ罕ニ見ル所トス就中小児ニ於テハ殊ニ少ナシト雖モ或ハ等閑ニ看過シテ之ヲ識得セサルコトアルニ似タリ但シ此瘍タルヤ仔細ニ之ヲ檢査スレハ左ノ症狀ヲ具スルヲ以テ之ヲ識別ス

内科摘要 卷之四 十八 載余齋哉

内科摘要 卷之四

金草齋藏梓

ルヲ得ヘシ即チ此症ニ於テハ患者若シ身ヲ俯
屈シテ坐スルハ嚥下及ヒ呼吸ノ更ニ困難ナ
ルヲ覺ユ然レ氏亦其格魯布ニ於ケルカ如ク日
ニ増劇セス又暫時ニシテ間歇スルヲナシ其他
頸項強直ニシテ其偏側或ハ両側ニ於テ腫起ヲ
呈ハシ指ヲ舌上ヨリ食喉ニ插入シテ之ヲ探索
スル片ハ其後部或ハ側部ニ於テ硬腫ヲ觸知ス
ルヲ得ヘシ乃チ其病ノ増進スルニ至レハ終ニ
卒厥或ハ食物ノ嚥下ヲ妨クルニ由テ死ヲ致ス
トアリ故ニ正シク其膿瘍タルヲ察セハ宜シ

ク膿ノ時ヲ窺ヒ柳葉鍼ヲ以テ食喉ヲ穿チ以
テ其膿ヲ排泄スヘシ大人ニ於テハ寧口ト口カ
ールヲ用キルヲ安全ナリトス但シ其膿漏泄シ
呼吸ニ隨テ卒然氣管ニ入ルハ窒息ヲ起スノ
恐アリ故ニ手術后速カニ患者ノ頭ヲシテ前ニ
俯屈セシムヘシ

胃管狭窄 ストリクチュール、オス、
ゼ、オソハギス英

此病ハ稀有ノ者ニシテ其較著タル原因ニ二般
アリ即チ一ハ形器的ノ變ニ由ル者例之ハ誤テ

内科摘要

卷之四

十九

或餘齋藏梓

腐蝕物ヲ嚥下シ或ハ他ノ咽喉潰爛症ニ由テ胃管ヲ侵蝕シ癒後瘢痕牽縮ヲ遺シテ之カ為ニ其狭窄ヲ生スル者はナリ一ハ官能ノ障礙ニ由ル者例之ハ猶喜斯的里症ニ於ケルカ如ク痙攣性ノ狭窄是ナリ即チ其症タルヤ復タ他ニ歸スヘキ原因ナクシテ嚥下困難ノ症ヲ起シ患者自ラ胃管ノ下際ニ於テ著シク其阻滯スル所ノ部分ヲ覺エ或ハ半バ嚥下セシ所ノ食物ヲ噎逆スル等ヲ以テ其狭窄症タルヲ診察シ得ヘシ然レ氏亦之ニ由テ尚疑惑ヲ免レサルキハ「ブローシ」

ヲ用キテ之ヲ検査スレハ必ス其真否ヲ確定シ得ル者ナリ蓋シ胃管狭窄ノ形器的ノ變ニ起因スル者ハ其療法ニ於テモ亦唯適宜ノ「ブローシ」ヲ取り之ニ油ヲ塗リテ暫時間胃管ニ挿入シ置クヲ毎日一回或ハ數回ニ及ヒ以テ其胃管ヲシテ漸々擴張セシムルノ外復タ他ノ伎倆ナシトス

胃炎 ガストリチス旬

單純ノ急性胃炎ハ太夕稀ナル者ニシテ予ハ唯

一婦人ノ胃部ヲ良人ニ蹴ラレテ此症ニ罹リシ者ヲ目撃セシノミ又夫ノ誤テ腐蝕毒ヲ嚥下シ之ニ由テ胃炎ヲ發スルカ如キハ必ス腸管モ亦之ニ連累セララル者ナレハ其焮衝固ヨリ胃ノニ局ラス但シ尋常ノ胃炎即チ獨ハ即チ胃肝ノ加答兒所謂胆汁ニシテ胃十二指腸及ヒ肝臟等皆此焮衝ニ累ル者ナリ

〔徵候〕凡ソ胃炎ノ徵候ハ即チ胃部ニ疼痛ヲ起シ輕々其部ヲ按スルモ之ニ由テ其痛ノ増劇スルヲ覺エ飲食共ニ盡ク吐逆シ患者苦痛ニ堪ヘス

輾轉悶亂シテ全身發熱ス然レモ其嘔吐盛ニシテ歇ムナク之カ為ニ血液ノ循環ヲ妨クルニ由テ脈候ハ常ニ沉衰シテ奮ハサル者ナリ

〔解屍之變〕胃炎ニ由テ死スル者ヲ剖觀スルニ其胃非常ノ赤色茶褐色或ハ濃鉛色ヲ呈ハシ其色モ亦全面一樣ナラズシテ班紋ヲナシ其形或ハ星ノ如ク或ハ樹枝ヲ倒懸スルカ如クニシテ每班ノ分界判然タラス且其血絡ノ膨脹スル者ヲ視ルナリ又急性ノ胃炎ニ罹リシ者ニ於テハ其粘液膜ノ軟化セシ者アリ又其較慢性ノ症ニ於

テハ或ハ軟化シ或ハ硬結シテ其質變厚セル者
アリ其他胃中ニ多量ノ粘液ヲ鬱蓄シ稀ニハ又
淋發ノ凝固セル者ヲ見ルコトアリ然レモ膿液ハ
決シテ之ヲ見ルコトナシ胃肝加答兒ハ停食或ハ
寒冷濕潤ニ冒觸スル等ニ由テ時トシテ之ヲ發
スルコトアリ然ルモ必ス嘔吐ヲ發シテ帶綠黃
色ノ液ヲ吐出シ通例吐物ノ量ハ少ナシト雖モ
其性甚タ酷厲ナリ其他頭痛眩暈便秘發熱等ノ
諸症ヲ發スル者ナリ蓋シ其療法ニ於テハ麻屈
涅失亞ヲ以テ能ク其刺衝ヲ寬解スル所ノ健胃

下泄藥トス故ニ又枸橼酸麻屈涅失亞水一壘ヲ
頻々ニ分服セシムルモハ速ニ寬解ヲ得ルコト多
シ又氷片ヲ口内ニ含ミ其溶解スルニ從テ徐々
ニ之ヲ嚥下セシムルモハ患者之カ為ニ爽快ヲ
覺ユト云フ以上諸藥ニ魚テ身體ヲ安靜ニシ且
成ルヘク飲食ノ量ヲ減セシムルモハ通例二三
日ニシテ全浴ヲ得ルニ足ルヘシ或ハ否ラサル
モ亦多日ヲ費スニ至ラスシテ恢復スルヲ得ル
者ナリ
又此膽液性ノ胃肝加答兒症ニ於テハ藍丸ヲ以

内科摘要 卷之四 二十三 載余齋藏辛

テ寢良ノ豫防及ヒ頓挫藥トス即チ初期ノ嘔氣
便秘及ヒ頭痛ニハ臨臥ニ藍丸二三往時ハ六
ハ乃至十
シト云フ用キヲ頓服セシメ翌朝ニ至テ麻屈涅失
亞一ヲ或ハ二ヲ許ヲ與スルキハ能ク其効ヲ奏
スル者ナリ但シ大便ノ通利宜キヲ得ル者ニハ
麻屈涅失亞ニ代ヘテ重炭酸曹達ヲ用フルヲ優
レリトス即チ此藥ハ每服其八分ヲ一ヲ用フ
レハ輕々膽液ノ排泄ヲ促シ又兼テ制酸ノ効ヲ
奏スル者ナリ
又所謂ル「シツク、ヘッデー」キハ即チ胃肝加答兒ノ一

症ニシテ其交感ニ由テ頭痛殊ニ劇甚ナル者ヲ
謂フナリ此頭痛ハ定期ヲ以テ發歇スルヲアリ
其療法ニ於テモ亦概子前症ノ療法能ク之ニ適
當ス又輓近ベグビー氏ノ説ニ從ヘハ的列並油
モ亦適宜ニ之ヲ用キルキハ本病ノ特效藥ナリ
ト云フ又ドクトルケンニフン氏ハ暫時ノ間復
硫化炭素ノ溶液ヲ顛顛或ハ耳後ニ貼スルヲ良
トス按スルニ亞兒箇兒ニ和シ硝子壘ニ佛國ノ
ハレテ其口ヲ患部ニ當ツルヲ云フ
醫家其他或ルハ小兒ニ於ケル一種ノ急性病
ニシテ速カニ衰弱危篤ヲ致ス者ヲ指シテ急性

内科摘要 卷之四 二十三 載余齋藏辛

内科摘要 卷之四 金華齋藏書

胃軟化ト做シ之ヲ論載セリ其説ニ據レハ此病ハ時トシテ一般流行スルコトアリテ初メハ猶ホ單純性胃炎ノ如シト雖モ忽チ下利ヲ發シ或ハ便秘シ煩悶甚シク衰弱不眠及ヒ人事不省等ノ症狀ニ陥リ僅カ一週或ハ二週間ニシテ衰脱シ終ニ死ヲ致スト謂ヘリ然レ氏予ハ未タ曾テ此ノ如キ症ヲ目撃セシコトナシ但シ一種ノ弛張熱ニシテ胃ノ刺衝ヲ兼ヌル者アリト雖モ是亦胃熱或ハ小兒ノ弛張熱ト做シテ之ヲ熱性病ノ部類ニ算入セリ故ニ吾鄙見ヲ以テ之ヲ論スレハ

別ニ急性胃軟化ノ名稱ヲ設ケテ之ヲ論載シ難キニ似タリ近來特ニドクトル、シ、ヒルトン、¹ジ氏ハ胃ノ急性膨脹症ヲ論載セリ乃チ此症ハ太タ稀ナリト雖モ劇甚ナル内臓病ノ症狀殊ニ暴吐ヲ起ス者ニシテ腹部ノ左偏側ニ當テ俄ニ膨脹シ其部ニ打診ヲ行フハ廣ク鼓音ヲ呈ハスヲ以テ徵トス故ニ其療法ニ於テハ胃唧筒ヲ以テ胃中ノ汚物ヲ排出シ飲食ヲ絶テ直腸ヨリ滋養品ヲ注入シ少日ノ間胃ヲシテ消化ノ勞ヲ避ケシムルヲ適當トス

内科摘要 卷之四 二五 載余齋藏書

慢性胃炎

コロニック、ガス トリチス英

抑此病ニ慢性胃炎ノ名ヲ命スル者之ヲ原病學的ニ詳論スルハ亦猶他ノ慢性炎ニ於ケルカ如ク甚タ妥當ナラサルニ似タリ然レモ又今日實際ニ於テハ一種病性ノ自ラ異ナル者ニシテ所謂ル慢性胃炎ナル者ヲ見ルト往々之アリ即チ之ヲ虚性胃弱症ト比較シテ其症狀ヲ左ニ列載ス

慢性胃炎

虚性胃弱

胃部ノ知覺太夕銳敏ナ胃部ノ知覺微銳敏ナル者アリ或ハ反テ遲鈍ナル者アリ

劇シキ運動或ハ刺戟性ノ増劇スルモ其痛ノ増劇スルヲナシ又刺戟性ノ食物ヲ用フレハ

通例必ス嘔吐ヲ發ス嘔吐ヲ發スル者罕ナリ

蓋シ此慢性胃炎ハ經久頑固ノ症ニ陥リ易シト

內科摘要 卷之四 二十六 載余齋或辛

雖モ敢テ危篤ヲ致ス者ニ非ス

〔療法〕反對刺衝法トシテ再三胃部ニ發泡膏ヲ貼
シ内服ニハ硝酸銀四分ハノ一ニ阿片八分ハノ
一ヲ伍用シテ二三日或ハ一週毎ニ硝酸銀ノ量
ヲ増加シ以テ終ニ一日二次一ハノ大量ニ至リ
阿片モ亦之ニ隨テ增量シ用フルハ寂モ其偉
効アルヲ今日ノ實驗ニ於テ確然ナル所トス或
人ハ又此症ニ亞硝酸毘斯密篤ヲ讚賞セリ總テ
此症ニ於テハ淡薄ノ食餌例之ハ牛乳ニ石灰水
少許ヲ和シタル者アルロトトタピオカ沙

穀米ゼルリ及ヒ炒物ヲ冰冷水ニ浸漬セル者
胃弱ノ條 等ヲ少許宛頻々ニ與フルヲ良トス又
ニ見ユル者ニハ氷片少許ヲ與フレハ胃ニ障ラス
シテ能ク渴ヲ消スルカ故ニ常水ヲ用フルニ優
レリ症ニ隨テハ他ノ食物ヲ廢シテ唯スキムミ
ルキル牛乳ヲ煮テ上ニ浮ミタノミヲ與ヘテ能ク
適應スルヲアリ

〔第六十二方〕硝酸銀ハ五 阿片ニハ 半ニハ ヲ取り混和シ

テ二十九ト為シ日ニ三次一丸ヲ與フ

〔第六十三方〕亞硝酸毘斯密篤一ツ至 三ツ ヲ取り十二

內科摘要 卷之四 二十六 載余齋或辛

包ニ分チテ一包宛水ニ和シ與フルヲ日ニ三四次

鎮嘔藥 アンチエメチック

夫レ嘔吐ハ胃炎及ヒ其他ノ諸病ニ於テ多ク傍發スル所ノ一症ニシテ之カ為ニ患者ヲシテ甚タ困苦セシムルヲアリ故ニ醫タル者ハ皆其療法ニ煉熟センヲ要ス是レ今茲ニ鎮嘔藥中其優効アル品類ヲ枚舉シテ参照ニ具フル所以ナリ其撰用ノ如キハ醫家宜シク本病ニ從テ之ヲ

考フベシ蓋シ嘔吐ヲ起ス所以ノ原因ニ於テハ固ヨリ數般ノ差異アリ況ヤ其彼此殆ント相反スル者アルヲヤ是ヲ以テ醫藥ノ品類モ亦隨テ多ナラサルヲ得ス然レモ其原因ノ明亮ナラサル者或ハ未タ其探索ヲ遂ケサル中ハ唯當然ノ病理ヲ推究シテ其宜シキニ從フヘキノミ

- 氷片
- 炭酸水
- 三鞭酒
- 囉囉地
- 沸騰飲
- 哥囉啡
- 石灰水
- 阿片加竜

内科摘要 卷之四 金華齋補劑

莫兒非水

芳香鹵砂精

複方益智丁幾

複方刺賢埴兒精

重碳酸剝篤斯

重碳酸曹達

麻屈涅失亞

龍腦

少量ノ甘汞

藍丸一名水銀丸

結列屋曾篤

桂水

丁香浸

青酸

雙蘭菊

硝酸銀

酸化銀

亞硝酸毘斯密篤

蔞酸セリウム

ラウダニウムノ灌腸法

香竈巴布

芥子

莫兒非水ノ皮下注入法

胃部ノ發泡膏

泡ヲ破テ醋酸莫兒非ニハニコ
ム粉十ハヲ和シ其部ニ搽布ス

[本註]第六十四方ヨリ以下第七十方迄ヲ見

胃ノ潰瘍

オルセル、オス、ゼ、
ストマツク、英

此病ハ頗ル劇性ナル者ニシテ體質虚弱ノ者殊

ニ婦人ニ於テ寢モ多シ中年以上ノ者ハ之ニ罹

ルト罕ナリ

内科摘要
卷之四
金華齋
附

〔現症〕胃中懊惱鈍痛ヲ覺工其痛背ニ徹シ胃部ヲ
按撫スレハ其一局處必ス痛ヲ覺ユルノ部アリ
又身體ヲ運動シ及ヒ食餌殊ニ熱物或ハ砂糖ヲ
食スルキハ必ス其痛ヲ増劇セシム其他頻々嘔
吐ヲ發シテ微々物ヲ吐出シ終ニハ必ス吐血ヲ
起ス者ニシテ即チ之ヲ以テ胃ノ潰瘍タルコト
ヲ證スルニ足ルヘシ然レモ其毎回吐スル所ノ
血ハ至テ少量ナル者ナリ
蓋シ胃ノ潰瘍ハ其症候ノ畧慢性胃炎及ヒ胃癌
脊椎ノ腐骨大動脈瘤等ニ似タルヲ以テ容易ニ

之ヲ監別シ難キト間之アリ然レモ夫ノ胃炎腐
骨及ヒ脈瘤ニ於テハ胃ノ潰瘍ニ於ケルカ如ク
吐血ヲ起スコトナシ又癌腫症ハ其ノ時期ニ於テ
其部ノ腫起ヲ顯ハシ腐骨症ハ脊柱ノ一部其形
ヲ變シテ突出スルヲ以テ之ヲ辨別スルヲ得ヘ
シ又胃ノ穿孔ヲ起シテ之カ為ニ腹膜炎ヲ繼發
スル者及ヒ夥多ノ吐血ヲ起ス者ハ此病ニ於テ
寢モ危険ナリトス即チ其穿孔ヲ起ス并ハ肚腹
膨滿シテ其痛ヲ全腹ニ及ホシ俄然トシテ生力
ノ虚脱ヲ呈ハス者ナリ

胃科摘要
卷之四
二十九
載余齋
附

内科摘要 卷之四

金草齋雜撰

療法 此病ニ於テハ淡薄ノ食餌例之ハ「アルロ」
ル「ト」ト「タ」ピオカ 澱粉、米、穀物ノ澱粉、飯、雞卵及ヒ
牛乳ニ石灰水少許ヲ加ヘタル者等ヲ與フルヲ
要ス又滋養ヲ要スル者ニハ總テ硬固ノ食物ヲ
廢シテ牛肉若クハ羊肉ノ濃羹汁ヲ用フルヲ良
トス 醫藥ハ其潰瘍ヲシテ乾癒セシメシメカ為ニ
硝酸銀阿片ノ丸劑 第六十二方 胃炎 或ハ酸化銀
一ハ或ハ二ハ 若クハ亞硝酸毘斯密篤ヲ與ヘ又其疼痛
ノ劇甚ナル者ニハ鎮痛劑トシテ單阿片丸若ク
ハ「ラウ」タ「ニ」ム「夫」鳩「答」莖「莖」莖等ヲ用キ又吐血ヲ起

シテ甚ク危險ナル者ニハ結列屋曹篤 半滴至二滴 單
寧酸鉛糖少量ノ底列並油格魯兒化鐵丁幾若ク
ハ硫酸鐵諸母尼亞等ヲ用フルヲ良トス予ハ曾
テ莫兎非水ノ皮下注入法ヲ施シテ偉効ヲ見シ
「ア」リ乃チ本病ニ於テ之ヲ行フハ專ラ嘔吐ヲ
鎮止センカ為ナリ

胃癌 カントマツクオフゼ
此病ハ通例胃ノ幽門 即チ下口 ヲ侵シテ其部ノ硬結
ヲ起ス「ト」窠モ多シト雖モ稀ニハ又胃ノ賁門 即チ

胃癌 卷之四 三十 載余齋雜撰

内科摘要
卷之四
金朝齋補

上
口ヲ侵ス_一アリ然ル_レハ胃部ニ疼痛ヲ起シ且
數劇發シ<sub>或ハ其痛ヲ發スル_一トナク_{或ハ發外_一ヨ}
リ胃部ヲ按撫スルニ其痛ノ劇易ニ隨テ觸覺モ
亦鋭敏トナリ頻リニ嘔吐ヲ發シテ食物粘液及
ヒ珈琲滓様ノ物ヲ吐出シ_{絶テ純血ヲ吐}酸敗液
其他胃中不和ノ諸症陸續トシテ蜂起シ呼吸惡
臭ヲ放チ大便常ニ秘閉シ羸瘦シテ顔面帶黃白
色トナリ其容チ宛モ黃疸症ノ血液不良ニ於ル
カ如ク又時トシテ刺衝熱ヲ發スル_一アリ加之
ナラス病増進シテ已ニ胃部ニ硬腫アルヲ觸知</sub>

スルニ至テハ愈胃ノ癌腫症タル_一ヲ證スルニ
足ルヘシ然レ_レ亦一概ニハ此硬腫ヲ以テ胃癌
ト做シ難シ何トナレハ假令ヒ其硬腫ヲ觸知ス
ルモ時トシテハ又良性纖維質ノ者タル_一アレ
ハナリ
蓋胃ノ癌腫症ハ通例四十歳以上ノ人ニ於テ多
ク見ル所ナリ但其經過ハ之ヲ中算スルニ大抵
一年ニ及ス者多シト雖モ或ハ其二年ニ至ル者
モ亦稀ニ之アリ乃チ此病ニ罹ル者ハ概子其胃
ノ飲食ヲ消化シテ之ヲ運輸スル_一能ハサルカ

内科摘要
卷之四
三十一
載余齋藏粹

内科摘要
卷之四

故ニ漸々衰弱シテ終ニ餓死スルニ至ル者ナリ
其療法ニ於テモ亦決シテ全治ヲ營ムヘキノ伎
倆アルヲナシ故ニ唯牛乳牛肉羹汁等ノ如キ滋
養ノ食品ヲ真ヘテ専ラ生カヲ保續セシメ且時
々鎮痛藥ヲ用キ以テ其痛楚ヲ緩解スルノ外復
タ如何トモナシ難キナリ然レモ胃ノ癌腫症ハ
頗ル多キ病トス曾テ巴里府ニ於テ諸般ノ癌腫
病ヲ總計セシニ四年ノ間九千百十八名ニ及ヒ
就中其胃ヲ侵セシ者二千三百三名ニ居ルト云
ヘリ近來ドクタトル、シ、ボール氏及ヒ「マルチノ

金卓齋

氏ハ他部ノ「ガンセル」ニ格魯羅兎澈度刺篤ヲ用
キテ殊効ヲ得シ「アリト云フ故ニ此症ニ於テ
モ亦醫家宜シク之ヲ試用スヘシ
又十二指腸廻腸直腸網腸等ノ癌腫症ハ之ヲ胃
癌ニ比スレハ太夕罕ナリト雖モ時トシテ此等
ノ部分モ亦癌腫症ニ罹ル「アルヲ以テ腹部ノ
腫瘤ヲ検査セント欲セハ常ニ必ス之ニ注意セ
スンハアルヘカラス

胃弱
ヂスペプシア旬

内科摘要
卷之四
三十三
載余齋

胃弱ハ諸家固ヨリ之ヲ分類中ノ一病門トシテ
論載スル者ナシ然レモ亦今日ノ病床實驗ニ於
テハ之ヲ一箇別種ノ病ト做シテ更ニ識別セサ
ルヲ得ス即チ此病ハ容易ニ其病理ヲ究メ難ク
且其現症モ亦太夕多端ナレハ今茲ニ論載スル
所ハ唯其大概ヲ記スルノミ

〔現症〕假令ヒ疼痛ハ缺クアアルモ患者常ニ意ヲ
胃部ニ介シ己ニ其痛ヲ發スル所ハ延テ胸部ニ
及ホスヲ屢之アリ故ニ誤テ之ヲ胃
病ト做スヲ勿レ又胃部ヲ按
撫スルモ之カ為ニ痛ヲ起スヲナク或ハ僅ニ之

ヲ覺ユル者アリ且嘔吐モ亦甚シカラス患者口
内ノ粘膠ナルヲ覺エ或ハ又酸味若クハ苦味ヲ
覺ユル者アリ面色蒼白ニシテ大便常ニ秘結シ
便色淡薄ナル者アリ其他噯氣シテ夥シク稀水
ヲ吐出シ或ハ嘈雜比剥昆垚里心悸動頭痛五官
ノ變調例之ハ重視
等ノ如シ等ノ諸症ヲ發スル者ナリ但
シ此胃弱症ハ敢テ危篤ヲ致ス者ニ非スト雖モ
亦太夕頑固ニシテ容易ニ治シ難キヲ屢之アリ
〔病理〕上件ノ諸症即チ官能
ノ障礙ハ飲食消化ニ關カレ
裝置ノ諸部殊ニ第一道ノ粘液膜諸腺按スルニ
肝腺及ヒ

胃弱要
卷之四
三十三
載余齋藏

胃腸ノ腺 或ハ筋質膜或ハ感傳神經系等ニ於テ
 何レノ部ニカ其本源ヲ有スル者ナリ例之ハ胃
 腸ノ粘液膜ニ在テハ其刺衝ノ為ニ嘔噎若クハ
 噎氣ヲ發シテ夥シク稀水ヲ吐出スル等ノ症候
 ヲ現ハシ又肝及ヒ腸腺ニ於テ其機能ヲ欠クキ
 ハ必ス大便秘閉シ之ニ次テ其諸症按スルニ風
 氣痲痛等ヲ
 フ云フ續發シ又胃腺及ヒ脾ノ分泌機能ノ全カラサ
 ルキハ猶肝臟機能ノ怠慢ナル者ニ於ケルカ如
 ク總テ飲食消化ノ機能ヲ妨ケ又胃ノ筋質膜ノ
 衰弱スルキハ飲食ヲ消化スルヲ能ハス腸ノ筋

質膜モ亦其衰弱シテ蠕動機能ノ怠慢ナルキハ通
 例便秘ヲ起スト寂モ多シ症ニ隨テハ又胃中ニ
 ト^ト生シ澱粉質及ヒ糖質ノ食物ヲシ
 テ益醋酸及ヒ乳酸ヲ醸成セシムルヲアルニ似
 タリ又神經ノ衰弱シ或ハ變調スルキハ之カ為
 ニ一種ノ症狀ヲ起シ或ハ他ノ諸症ヲシテ増劇
 セシノ或ハ特リ此衰弱及ヒ變調ニ由テ胃弱症
 ヲ起ス^トアリ故ニ之ヲ神經性胃弱ト名ツク
 原因凡ソ胃弱症ハ唯一箇ノ原因ヲ以テ之ヲ發
 スル者アリ或ハ種々ノ原因相合シテ之ヲ起ス

一アリ爰ニ其一ニヲ略舉スレハ即チ飲食ノ過
度或ハ其不足ナル者或ハ飲食スルテ急卒ニシ
テ咀嚼ノ全カラサル者身體ノ運動不足ナル者
非常ノ勞動勤學或ハ意識ノ感動強烈ノ酒精阿
片煙草珈琲等ノ過用藥劑ノ妄用等是ナリ
〔療法〕此病ノ療法ハ飲食ノ節度ヲ守ラシムルト
醫藥ヲ與フルトノ兩件ニ在リ就中殊ニ其飲食
ノ節度ヲ守ラシムルヲ以テ最モ肝要トス例之
ハ每餐其時ヲ定メ且食スルニ充分ノ時間アル
ヲ要ス而シテ其食餌ハ品寡クシテ養多キ者ヲ

金
卓
齋
雜
抄

用中シメ毎餐其品ヲ換ヘンヨリハ寧ロ日々其
烹灸調理ヲ更ハルヲ良トス故ニ牛肉ヲ用フル
ニ一回ハ羹汁トシ一回ハ炙肉トシテ食スルヲ
優レリトス某ノ胃弱家ハ自ラカメテ多種ノ品
類ヲ止メ常ニ唯牛肉羊肉及ヒ陳蒸餅ノ三ヲ食
スル者アリ乃チ其食品ヲ撰ハント欲セハ有害
ニシテ一般人ノ食セサル所ノ物ハ勿論各胃ノ
狀態ニ由テ嫌忌スル所ノ物ニ注意センテ要
ス然レモ其人知覺銳敏ニシテ自ラ其消食機ノ
為ニ最モ能ク適應スル所ノ品物ヲノ三撰ニテ

斗
摘
要
卷
之
四
三
十
五
藏
余
齋
藏
粹

金車齋雜抄

之ヲ用キ他物ハ決シテ之ヲ食セサル者アリ假令ヒ消食機ノ衰弱セル人ト雖モ亦多クハ牛肉羊肉雞雞七面鳥蠟等ノ肉ヲ食スルニ堪サルモノナカルヘシ但シ燒キ或ハ生肉ニテ之ヲ用フシタル者故ニ之ニ兼テ陳蒸餅其他炒リタル果物、飯、トマト、及ヒ柔嫩ナル野菜菜大根ヲ食セシメ且其人衰弱シテ之ヲ興奮センカ為ニ酒精ヲ要スル者ニハ囉囉地ヲ寢モ良トス碩學チヤップメン氏ノ訓戒ニ曰ク酒精ヲ用フルヲ許サハ必ス其度ヲ節ニスヘシト醫タル者必ス此言

ヲ忽ニスヘカラス例之ハ午餐ノ時或ハ午餐後ニ於テ麻太粒酒マテイラ設里酒セリハ半酒盞大約エール酒ハ半水盞囉囉地及ヒウキ酒ハ一茶七或ハ二茶七許ヲ與フルヲ以テ足レリトス又朝食及ヒ晚餐ニハ神氣ヲ爽快ナラシメンカ為ニ茶ヲ用フルヲ寢モ良トス又牛乳ハ容易ニ之ヲ消化シ能ハサル者アリ然レモ滋養ノ為ニハ寢モ良品ナリ但シ珈琲ノ如キハ有名ノ醫家之ヲ許ス者アリト雖モ予ハ屢珈琲ヲ用フルニ由テ此胃弱症ヲ起セシ者ヲ經驗セリ故ニ當時ハ斷然之

斗滿要 卷之四 三十六 載余齋藏辛

ヲ用フルヲ禁ス又コ、ア飲ハ胃ノ衰弱セル者ニハ膏粱ニ過クレ氏或ハ好テ之ヲ用フル者アリ菓物ハ通常必要ナル食品ニシテ其新鮮ナル者ハ殊ニ良トス就中夏時ノ挑ノ如キハ之ヲ忌ム者稀ニメ大抵皆之ヲ用フルニ宜シ其他又此菓物ヲ蒸シテ用フルハ緩下泄ノ効アリ然レ氏糖漬ノ菓物菓子饅頭ノ類ハ之ヲ禁スヘシ又毎餐忽チ飽テ一回ニ充分ノ量ヲ盡スル能ハサル者ニハ其飢ヲ凌カシメシメシカ為ニ各餐ノ間ニ於テ椒料按スルニ生姜山椒ノ類ヲ云フヲ咬マシムルヲ良ト

ス總テ久シク食ヲ斷チテ胃中ヲ空虚ニシ或ハ其飽満ニ過クルハ孰レモ共ニ胃ノ為ニ害アル者ナリ「ドクトルブルウン」セ「ワルド氏」ハ毎少時頻々ニ消化シ易キ食物少許ヲ與ヘテ頑固ノ胃弱ヲ治セシ「アソト」云フ但シ百方之ニ諸藥ヲ用フルモ其効ナキハ一時之ヲ要スル「アソト」雖モ同氏ノ命スル所ノ如ク頻數ニ過キテ一時間兩三次ニ及フハ患者之ニ堪ヘ難ク忽チ困弊スルニ至ル者ナリ胃弱家ハ日々開濶氣中ニ逍遙シ且皮膚ノ機能

ヲ保續セシカ為ニ日々温湯ニ浴スルヲ怠ル
ヘカラス即チ皮膚ノ機能ハ常ニ胃ノ機能ト相
交通スル者ナルヲ以テナリ然レモ食前及ヒ食
後ハ暫時間強キ運動ヲ避ケシムヘシ是レ即チ
民俗ニモ謂ル如ク午餐殊ニ飽食後ハ暫時ノ間
安坐シテ休息スルニ宜シケレハナリ
情意ノ安否及ヒ神經ノ感動モ亦大ニ此病ニ作
用ヲ為ス者ナレハ常ニ心思ヲ勞役スル人若ク
ハ重任ヲ負フ者ニ於テハ甚タ治シ難キヲアリ
是ヲ以テ萬事心外ニ擲チテ悠々^{ブラク}旅行シ或ハ温

内科摘要
卷之四
金車齋

泉ノ地ニ遊ハシムル等ノ如キハ大ニ其恢復ヲ
助クルヲアリ
凡ソ此胃弱症ヲ主治スル所ノ藥劑ハ太々多端
ニシテ一定シ難シト雖モ就中其要用ナル者ハ
即チ強壯劑下劑制酸劑其他ノ鎮痛藥及ヒ轉換
劑等是レナリ
強壯劑植物類ノ單苦味藥例之ハ健質亞那拈夫
亞及ヒ格倫僕ハ健胃劑トシ用キテ殊ニ効アリ
又「チソタ」ヲ用キテ奇効ヲ得シトアリ或ル人ハ
又酸化銀ヲ此病ノ特效藥トシテ之ヲ賞用セシ

内科摘要
卷之四
三十八
載余齋

ナリ

〔第七十二方〕複方健質亞那丁幾 大黃丁幾 各二

ヲ取り混和シテ每食前ニ二沼許ヲ與フ

〔第七十三方〕健質亞那越幾斯 大黃末 各半ヲ取

リ混和シテ二十丸ヲ作り一日三次一丸或ハ

二丸ヲ與フ

又專ラ神經ノ衰弱ニ係カル者殊ニ經久頑固ノ

症ニ於テハ番木鱉越幾斯或ハ少量ノ斯葛里幾

尼ヲ用キテ屢其偉効ヲ見シテアリ又乏血家ニ

於テハ沃實錢ヲ用フルヲ良トス

〔下劑〕大黃ハ從來之ヲ常ニ大便ノ秘閉シ易スキ

症ニ用フト雖モ之ヲ單用シテ其効ヲ奏セサル

者或ハ此藥ニ慣レテ終ニ其効カヲ失フハ宜

シク之ニ複方哥囉聖シ越幾斯蘆薈或ハポドヒル

リ華兒斯ヲ加ヘ丸トシ用フヘシ

〔第七十五方〕大黃 カスタイル石鹼 各半 亞過子

油 四滴ヲ取り混和シテ二十丸ヲ作り大便ノ秘

閉スル時ニ臨ンテ一丸或ハ二丸ヲ與フ

〔第七十六方〕大黃 カスタイル石鹼 複方哥囉聖

越幾斯 各半ヲ取り混和シテ二十丸ヲ作り大

本草綱目
金草

便ノ秘閉スル者ニ臨テ一丸或ハ二丸ヲ與フ

〔第七十七方〕大黃_二 蘆薈_一 番木鱉越幾斯_四

ヲ取リ混和シテ二十九丸ヲ作り大便ノ秘閉ス

ル者ニ臨ンテ一丸ヲ與フ

又症ニ從テハ時トシテ梅那麻屈涅失亞若クハ

硫黄ヲ用フヘキヲアリ或ハ又サラトガ水左ル

ツンハム水及ヒウキチ水按スルニ皆鑛泉ノ名

ナラシメテ胃ノ機能ヲ整復スルノ卓効ヲ

奏セシメアリ

〔制酸劑〕胃中酸敗液ヲ生スル者ニハ食後ニ重炭

酸曹達五匁乃至十匁若クハ其半量ノ重炭酸剥

寫斯若クハ石灰水三匁許ヲ與フル者ハ患者之

カ為ニ大ニ輕快ヲ覺ユト云フ又症ニ從テハ炭

酸麻屈涅失亞及ヒ芳香礳砂精ノ能ク之ニ適應

スルコトアリ木炭末ハ其酸敗液ヲ吸收スルヲ以

テ此症ニ効アリ亞硫酸加兒基同曹達及ヒ次亞

硫酸加兒基同曹達モ亦防腐ノ能カアルヲ以テ

飲食ノ不消化ニ由テ續發スル所ノ諸症按スル

等吞酸風氣ヲ緩解スルノ効アル者ナリ

〔轉換劑〕胃弱症ニ於テハ肝臟ノ疾患殊ニ其機能

內科摘要 卷之四 四十 藏餘齋藏

内科摘要 卷之四 金章

ノ怠慢ナル者常ニ多シトス乃チ此症ニハ初メ先ツ適宜ノ藍丸ヲ用フルルハ必ス其効ヲ奏スルコト己ニ實驗ニ於テ顯ナル所トス便チ之ヲ用キント欲セハ日ニ三次四分ハノ一ヲ與ヘ持長シテ殆ント一週間ニ至ルヲ良トス但シ此藥ハ偶右ノ如ク反復シテ之ヲ用フヘキコトアレトモ亦之カ為ニ流涎ヲ起スニ至ルコト勿ランヲ要ス
第七十四方 健質亞那越幾斯 大黃末 各半 藍丸 各四 丁香油 滴四ヲ取り混和シテ二十丸ヲ作り二三日ノ間持長シテ日ニ三四次一丸ヲ與

硝塩酸ハ每服三滴或ハ四滴ヲ取テ之ヲ與フルル者ニシテ殊ニ肝臟機能ノ怠慢ナル者ニハ之ニ次テ藍丸ヲ與フルヲ良トス蒲公英ハ假令ヒ其効塩酸ニ劣ルモ亦同効アル者ナリ或ル人ハ又硝酸ヲ一種ノ強壯藥トシテ大ニ之ヲ賞用セシナリ其服用量ハ二滴乃レウベ氏ハ硝酸ノ代リニ塩酸ヲ賞用ス又コルウサルト氏ブロンドロツト氏レマン氏及ヒベルナルド氏ハ亞兒加

内科摘要 卷之四 四十一 職除齋職

内科摘要 卷之四 四十二 鐵餘齋藏 金卓

里劑、食塩、稀亞兒箇兒、亞的兒、吐根及ヒ硝酸毘斯
密篤ヲ以テ胃液ノ分泌ヲ催進スル所ノ藥劑ト
セリ

〔本註〕倫敦府碩學キャンブル氏ハ「ボウドールト
其氏ノ曾テ發明セシ所ノ「ペプシン」ヲ讚賞セリ
然レ氏我邦ニ於テハ未タ其確効アルヲ聞カ
ス又倫敦府碩學「バウ」氏ノ説ニ據レハ此「ペ
プシン」ハ概子無用ニ屬スル者ナリト云フ
嘈雜ハ大抵胃中ノ酸敗液ニ由テ起ル所ニシテ
恐クハ亦酪酸性ノ泡釀ヲ起シテ更ニ之ヲ増進

セシムル者ナランカ即チ此症ニ於テハ芳香硫
砂精于姜丁幾若クハ龍腦水及ヒ其他上ニ記載
セシ所ノ制酸劑ヲ用フルヲ良トス或ハ又哥羅
弗ヲ五滴或ハ十滴宛與フルモ亦可ナリ

〔第七十八方〕重炭酸曹達一 複方益智丁幾一

龍腦精一 汚一 或ハ一 汚一 芳香大黃舍利別一 汚一

取リ之ニ薄荷水ヲ加ヘテ全量四汚ニ至リ混
和シテ每服一汚許ヲ與フ

胃瘕即チ 胃痛ハ 胃弱家ニ於テ常ニ多ク見ル所ニシ

テ驅風劑ノ能ク之ニ適應スル者ナリ例之ハ加

耶普底油四滴ヲ一、小塊ノ砂糖ニ點シテ之ヲ頓服セシムレハ速ニ其効ヲ奏スルヲアリ世人多クハ其痛ヲ緩解センカ為ニ龍腦精、複方刺賢堦兒精、複方益智丁幾及ヒ濃干姜丁幾等ヲ用キ或ハ一口ノ熱湯ヲ嚥下セシムレハ一時寛解ヲ得ルヲアリト云ヘリ

噯氣ヲ發シテ夥シク稀水ヲ吐出スル者ニハ緩性收斂劑例之ハ琥珀油、阿仙藥、刺答尼、硫酸錢譜母尼亞、結列屋曹篤及ヒ格魯兒化錢丁幾等ヲ用フルヲ最モ良トス¹ドクトル、ラウソン氏ハ亞硫

内科摘要
卷之四
四三
載徐齋藏粹

酸劑ヲ以テ嘈雜ノ必効藥ナリトス

又吃逆ハ急慢ヲ論セス胃弱ニ併發スル所ノ傍症ニシテ輒近專ラ之ニ格魯羅兒、敝度刺篤ヲ稱用ス

第八十方 硫酸錢譜母尼亞^ニ 挂水^四ヲ取り溶和シテ每二三時ニ一沼許ヲ與フ

第八十一方 結列屋曹篤^{二十} 玫瑰昆設兒弗^或 健質亞那越^幾ヲ取り混和シテ二十九ヲ作り每二三時或ハ每四時ニ一丸ヲ與フ

畢竟胃弱家ハ醫治ヲ要スルヨリハ却テ自己ノ

内科摘要
卷之四
四三
載徐齋藏粹

攝生ヲ肝要トス軌近ノ教頭又チャップメン氏ノ
 訓戒ニ曰ク汝チ若シ酒客タラハ必ス酒ヲ禁セ
 ヲ汝チ若シ阿片煙草ヲ嗜マハ必ス之ヲ廢棄セ
 ヲ汝チ若シ奢侈ヲ以テ生トセハ必ス其生計ヲ
 改メテ萬事節儉ヲ守レヨ汝チ若シ安逸ニ居ラ
 ハ必ス勉メテ今日ノ事業ヲ操レヨ汝チ若シ學
 ヲ好マバ必ス半夜ノ燈ヲ廢セヨ患者若シ困苦
 ニ堪ヘスンハ醫者必ス豫メ其治スヘキヲ辨明
 シ以テ之ヲ慰メヨ又其治スヘカラサル者ニハ
 必ス産業利潤職務等ノ事ヲ勸解シ以テ患者ヲ

安慰セヨト此言孰レモ皆信セサルヲ得ンヤ
 左ニ掲クル所ノ食品表ハリールド氏ノ記載ニ
 據テ僅ニ之ヲ折衷スル者トス

消化シ易キ食品

- 綿羊ノ肉 ○ 野獸ノ肉 ○ 山兔ノ肉 ○ 犢牛ノ腓肉
- 雞雞 ○ 七面鳥 ○ 鷓鴣 ○ 雉鳥 ○ 雉鳩 ○ ビーフ
- チ牛肉ノ重湯煎 ○ ムットン綿羊ノブロツ肉羹汁 ○ 牛乳 ○ 比
- 目魚 ○ ハットックコダ ○ 鮮ヒラ ○ 鞋底魚シタビ ○
- 一般ノ鮮魚 ○ 焼タル蠣ノ即チ貝焼 ○ 陳蒸餅日焼テ
- 經者 ○ 飯 ○ タピオカ澱粉質ノ食品 ○ 沙穀米 ○

内科摘要 卷之四 金車齋

牛ノ肝臟 ○ 塩漬ノ肉類 ○ サウセーシ
 等ヲ云フ 肉類ニ野菜ヲ ○ 鯖バサ ○ 鰻ギウナ ○ 鮭ケサ
 ○ ハシス 交セタル食品 ○ 塩漬ノ魚類 ○ 海老ビエ ○
 ○ 鱸シコロ ○ 赤鱈エアカ ○ 塩漬ノ油 ○ 流動牛酪 ○ 煮熟ノ雞
 蟹 ○ 芝海老 ○ 貝類 ○ 油 ○ 流動牛酪 ○ 煮熟ノ雞
 卵 ○ 乾酪 ○ 新蒸餅 ○ 糒糕ヤカル ○ ボトルヲ附テ
 焼タル蒸餅 ○ 蒸菓子 ○ コスタルド 鶏卵ニ牛乳
 キ或ハ煮 椀子、梨、李 ○ 櫻子及ヒパイナップル 熱産
 タルモノ 椀子、梨、李 ○ 櫻子及ヒパイナップル 熱産
 スル果 ○ 木瓜及ヒ葱 ○ 胡蘿蔔ニン ○ 碗豆、蠶豆、
 種ノ果 ○ 醋漬ノ物 ○ ショコレート 一種ノ ○ 三鞭酒パン
 菌 ○ 醋漬ノ物 ○ ショコレート 一種ノ ○ 三鞭酒パン
 華氏内科摘要卷之四終

内科摘要

全部貳拾貳册

桑田衡平藏板

東京藥研堀町

馬喰町二丁目

島村屋利助

通三丁目

丸屋善七

同二丁目

山城屋佐兵衛

茨元書林

